平成２６年　４月２５日発行

図書室だより

青少年センター図書室
℡２７－２４９５（平日）

こどもの読書週間

いつもいっしょ。本といっしょ。

子どもたちにもっと本を、子どもたちにもっと本を読む場所をとの願いから、「こどもの読書週間」は1959年（昭和34年）に誕生しました。もともとは、5月5日の「こどもの日」を中心とした2週間（5月1日から14日）でしたが、子どもの読書への関心の高まりを受けて、「子ども読書年」である2000年に現在の4月23日（世界本の日・子ども読書の日）から5月12日に期間を延長しました。開始当時から、図書館・書店・学校を中心に、子どもたちに本を手渡すさまざまな行事が行われてきました。

幼少のときから書物に親しみ、読書の喜びや楽しみを知り、ものごとを正しく判断する力をつけておくことが、子どもたちにとってどんなに大切なことか……。子どもに読書を勧めるだけでなく、大人にとっても子どもの読書の大切さを考えるとき、それが「こどもの読書週間」です。

青少年センター図書室では、5月から、子どもたちに読んでほしいおすすめの絵本や児童書の展示を行いますので、ぜひお子さんと一緒にお立ち寄りください。

「2014年本屋大賞」結果発表！

「全国書店員が選んだ いちばん！売りたい本 2014 年本屋大賞」が4月8日発表されました。

本屋大賞とは、本が売れない時代と言われる中で、 商品である本と、顧客である読者を最も知る立場にいる書店員が「売れる本をつくる」「出版業界に新しい流れをつくる」「出版業界を現場から盛り上げていく」という考えの下で生まれた賞です。全国の書店で働く書店員が過去1年の間、自身が自分で読んで「面白かった」、「お客様にも薦めたい」、「自分の店で売りたい」と思った本を選び投票し、決定されます。

過去の大賞には、『海賊とよばれた男』（百田尚樹/著）、『謎解きはディナーのあとで』（東川篤哉/著）、『天地明察』（冲方丁/著）などが選ばれています。今回の結果は以下のとおりです。

大賞

『村上海賊の娘』
（和田竜/著）
『のぼうの城』著者が4年をかけ、この1作だけに注ぎ込んだ最高傑作。

2位

『昨夜のカレー、明日のパン』
（木皿泉/著）
数々のテレビドラマを手掛ける人気脚本家夫婦がはじめて綴った、悲しいのに幸せな気持ちになれる連作長編小説。

3位

『島はぼくらと』
（辻村深月/著）
小さな島からフェリーで本土の高校に通う4人の別れと、その島に住む人々の生活や葛藤を描いた物語。

4位 『さようなら、オレンジ』（岩城けい/著） 5位 『とっぴんぱらりの風太郎』（万城目学/著） 6位 『教場』（長岡弘樹/著） 7位 『ランチのアッコちゃん』（柚木麻子/著） 8位 『想像ラジオ』（いとうせいこう/著） 9位 『聖なる怠け者の冒険』（森見登美彦/著） 10位 『去年の冬、きみと別れ』（中村文則/著）

☆青少年センター図書室では、4月末まで特集を展示していますので、ぜひご覧ください！